

薄井憲二出演『白鳥の湖』フィルム

斎藤慶子
大阪公立大学

薄井憲二（1924—2017）が『白鳥の湖』の王子役で出演した映像（ダブル8フィルム、3分程度）を紹介する。薄井憲二の甥の薄井佳恭氏より学会報告のために貸し出し及び使用の許可を得たものである。フィルムの側面に「Chiyo's Swan Lake」と記入されている以外は、本フィルムの出自を明らかにする情報は残されていない。ダブル8フィルムが日本社会に流行したのが昭和30年代ということから、1950年代以降の映像と推定される。本映像は次の二点においてその貴重さが認められる。第一に、日本人が『白鳥の湖』を踊る1950年代の映像は、個人宅に所蔵されている可能性はおおいにあるが、一般に公開されているものは管見の限りでは見当たらない。第二に、第二場の湖畔の場面で、王子とオデットのデュエットに王子の友人ベンノが参加する。これはプティパ&イワノフ版の演出を引き継ぐものであり、ソ連経由で受容された『白鳥の湖』演出版とは異なっている。本報告では、映像の分析を通じて、日本人のバレエ文化受容経路のうちのひとつをあきらかにすることを目的とする。

本フィルムに収録されているのは、『白鳥の湖』第二場の湖畔の場面から、オデットの登場、王子との出会い、アダージョのリハーサルのそれぞれ断片と、群舞のごく一部、また教室で子供が戯れる一瞬である。うらわまことの見立てでは、薄井がどこかの発表会にゲスト出演した際のリハーサル映像ということである。このことから、本映像で見られる演出は、1) 薄井憲二が所属していた東勇作バレエ団で上演されていた演出を振り移したものの、2) 薄井憲二独自の研究の成果、もしくは教室のレベルに合わせた改変版、3) その両方、の可能性が考えられる。

映像分析の結果、次のような傾向が見受けられた。

- 1) シリル・ボーモント『白鳥の湖という名のバレエ』（1952年）に言葉で記述されている振付にきわめて類似した振付。
- 2) ソ連バレエの影響が見受けられる振付。
- 3) 上記どちらにも属さない振付。

割合から言えば、第一の特徴がもっとも顕著で、第二、第三の特徴が現れているのはごく限られた部分にとどまる。第二の特徴は当時日本で公開されていたソ連映画の影響が考えられる。1953年にソ連で製作された映画『ロシアバレエの巨匠』（ラッパポルト監督）に収録されていた『白鳥の

湖』は、日本でも同年に中央映画社配給で公開されていた。第三の特徴は、現場に即した変更だと考えられる。もしくは、小牧正英の振付を受け継いでいる可能性も考えられる。

特に注目したいのが、第一の特徴である。ボーモントの前掲書には、プティパ&イワノフ版に近い演出を知っていたと考えられるイギリスの複数の団体の演出が記録されている。

薄井憲二が所属していた東勇作バレエ団では、戦前から蘆原英了を講師に迎えてバレエ研究会を行っていた。蘆原のおかげでヨーロッパのバレエの情報を取得することが可能となり、東勇作バレエ団ではチェケッティ・メソッドの教則本（英語）に従って訓練が行われていたという。チェケッティはバレエ・リュス付きのバレエ教師で、革命後にロンドンで一時期教室を持っていた。薄井の書籍収集熱も戦前に始まっている。入手時期は明らかでないながら蘆原と薄井の文庫にはボーモントの前掲書が含まれており、東や薄井が『白鳥の湖』演出にあたってボーモントの記述を参考にした可能性はきわめて高いと言える。

このことから浮かび上がってくるのが、ロシア一辺倒でない日本のバレエ形成の一側面である。ロシアからの亡命者を始めとして、日本のバレエ発展の歴史にはロシア出身者の尽力が大きいことを、報告者も含めて先行研究は強調してきたが、それ以外の道筋があったことを示すのが今回取り上げた事例である。

ロシア革命後、バレエ・リュス関係者が活路を見出したうちのひとつの国がイギリスであり、帝国ロシアバレエの伝統を受け継いでいるという自負も当事者たちにはあった。蘆原英了を通じて東勇作および薄井憲二が継承したのも、あくまでもソ連バレエではなく、帝政ロシアバレエをイギリス経由で受け取ったという強い自意識であったといえるだろう。日本のバレエ界全体を見ると、1957年にボリショイ劇場バレエ団来日公演を経てすっかりロシアバレエ一色に染まってしまうが、その前段階にはイギリス経由の帝政ロシアバレエ受容という道があったのである。その精神が、薄井憲二による一連の帝政時代のバレエの再演というのちの啓蒙的活動の大きな原動力となったのであろう。